

4. 統合教育を考える

= A中学校に学ぶ B子の例を通して =

高槻市教育研究所

重永敏行

1. はじめに

近年、分離教育の対立概念として、統合教育が呼ばれるようになってきた。「障害」児も健常児も普通学校で学び、仲間と共に育ち合うことが必要であるとの視点から、高槻市においても統合教育が進みつつある。その中で普通学級で学ぶ視覚障害児を学年別にみると、下表のようになる。（下表以外にも若干名の弱視児が在籍していると思われる。）

= 高槻市立小・中学校に通う視覚障害児 =

学年 性別	右	左	疾 患 名	備 考
小1 男	0.02	0	ピーター氏病	(先天性内皮変性症)
小1 男	0	0.03	先天性緑内障	
小2 女	0.3	0	小眼球症	眼球振盪
小3 男	0.04(0.4)	0.04(0.4)	先天性弱視	眼球振盪
小3 男	(0.7)	(0.4)	先天性弱視	コンタクト使用
小3 男	0.08(0.2)	0.2(0.2)	先天性弱視	
小3 男	0.1(0.2)	0.1(0.15)	先天性白内障	
小4 女	0.04	0.1	先天性白内障	
小6 男	0.03	0	未熟児網膜症	網膜剥離変性、眼球振盪
中1 女	0	0.01	先天性緑内障	

「牛眼なんていやな呼び方。牛のドロンとした眼が入ってるなんて気味悪い。」と笑いながらだが抗議するA中学校1年生B子について述べることにより、今後の統合教育の在り方を考える上での一資料としたい。

2. B子の生育歴および教育歴

- 昭和45年 3月 H市に生まれる。
- 昭和45年11月 保健所の検診で眼疾を指摘され、京都第一赤病院・関西医科大学病院で検査の結果、先天性緑内障（牛眼）と判明する。
- 昭和46年 1月 京都第一赤病院に入院し、3回手術を受ける。
- 昭和49年 3月 公立保育所の入所手続きをするが、手がかかりすぎるという理由で断られる。（視力0.03）
- 昭和49年 9月 G盲学校幼稚部の幼育相談に入り、週一回4か月間通う。
- 昭和50年 2月 眼科医の診断書を添えて、再度保育所に入所申請したが、幼育相談の先生から、「非常に危険である。」という忠告を受けて、申請を取り下げる。
- 昭和50年 4月 G盲学校幼稚部に入学するが、「安全については保障できない。」と言われる。
- 昭和50年 秋 疲れが見えはじめ、自分でトイレに行けず、おもらしが多くなる。医者に相談すると、往復3時間の通学は無理だと

言われる。

昭和 51 年 3月 大阪市立小児保健センター眼科へ検査に行く。小学校就学を前にしていたので、地元小学校の養護教諭・障害児担当教諭および教育委員会事務局からも同行。実用視力 0.7 と判明する。

昭和 51 年 4月 H 市立の小学校に入学することにする。
G 盲学校の幼育担当の先生からは、「将来は失明してしまうのだから、墨字を覚えて役に立たない。盲学校の方がよいのでは。」と言われる。しかし親としては、
① 弱視学級が盲学校にない。全盲児と同じように、いま盲としての教育を受けさせることはどうか。
② 視力のあるうちに、墨字を教えてやりたい。
③ 晴眼者と交わって、さまざまな経験を積ませたい。
④ 盲学校に通うようになると、近所の友達と離れるので、遊ぶときも共通の話題がなくなる。
との考えに立ち、地元の小学校へ入学する。

昭和 51 年度 小学 1 年生
体育の一部を除いて普通学級で学習する。母親がマジックで書写したものを、拡大教科書として使用する。

昭和 52 年度 小学 2 年生
夏休みにボランティアより点字指導を受け、2 学期より点字に切り換える。これは視力も落ち、また読書能力がついていけなくなったため、家庭からの依頼で行なう。学校側は点字を使用せず、またこの点字使用がきっかけとなり、2 学期より、ほぼ全面的に「障害児」(ちえおくれ) 学級での学習となる。

昭和 53 年度 小学 3 年生
普通学級に戻れず、「障害児」学級での学習が行われる。
国語・算数などはマンツーマンで学習するが、大部分の教科は「ちえおくれ」の児童と共に学習する。
遠足には親同伴を要求され、一般児童とは別行動をとらされる。この頃ボランティアより点字楽符、盲人用そろばんの指導を受ける。

昭和 54 年度 小学 4 年生
学校からの言い渡し事項

- ① 遠足・登下校は親の責任で行なう。
- ② 安全面については保証できない。
- ③ 学習内容は学校に一任すること。
- ④ 盲学校が適当と思われる。（これは昭和52年からの引き続き）

昭和55年度 小学5年生

家の都合で高槻市内に転居する。教育上の要求とか不満のためではない。高槻市立I小学校に転校し、普通学級に入る。

昭和56年度 小学6年生

5年生に引き続き、普通学級で学習する。

昭和57年度 中学1年生

高槻市立A中学校に進学し、普通学級に入級、今日に至る。

3. I小学校での様子

登下校に関しては集団登校し、クラスの仲間と下校する。校内での教室移動等は、日直がつく。また連絡事項や書写は隣席の児童が行なう。行事には一般児童と同じように参加し、教科外でも手芸クラブおよび放送部に入部する。学習方法は点字教科書・点字板・レーズライターを使用する。点字教科書は始めはボランティアが打ったが、後に高槻市教育委員会から支給する。教科学習は全て一般児童と同じであるが、視力障害のため困難点もあり、さまざまな工夫がなされる。生活面では、やや級友の中にとけこめない点があったが、次第に解決する。

教科学習面での状況と教師側の取り組みは以下の通りである。

国語 カードで漢字の墨字を作って覚えさせる。

社会 覚えるのが好きで、教科書のすみずみまで覚える。

算数 階段式の体積を求める問題が分りにくく、物を使って説明する。計算は暗算ですので、面倒がって誤りが多い。

理科 実験は手でさわって分らせる。

図工 手でさわらせながら写生する。

体育 球技はやりにくい。運動会では手をつないで走る。

手芸 スピードは遅いがきっちとする。

担任教師は、短期間で点字を打ち、読みとれるようになった。隣り合うクラスの教師たちもまた、点字をはじめ、B子との接触に必要な技術・知識を身につけたのである。そして担任は、それが当たり前のこととして、授業にB子の

ための創意工夫を行った。

4. B子および父母の教育要求

ここまで見てきて、考えさせられるのは、

- ① 小学校4年までの学校生活とそれ以後が質的に大きく異なること。
 - ② 父母および本人の要求は基本的には当初から変らず、したがって小学校4年までの置かれた状況に対してと、それ以後については評価がほぼ反対のものになること。
- である。

①に関しては、「障害」児教育に関する考え方や取り組みが抜本的に異なることを示す。即ち、この数年ないし十数年の間に大きく台頭してきた統合教育の考え方と、旧来よりの分離教育との違いである。但し、統合教育を進める動向は、全国的・全面的ではなく、むしろまだ地域が限られ、あるいは地域によっても度合いが異なることもさし示している。

②に関しては、父母の要求が、一貫して晴眼者と共に育つこと、ごく「普通」の子どもとして育つことを望んでいたからである。これは父母が「ある程度の視力がある間は……。」という限定はつけていても、基本的には前述の「障害」児教育の新しい動向の反映を見るべきであろう。

B子とその家族にとって、小学校4年までの遭遇は決して気に入るものはなかったようである。不満の原因を幾つかに分けると、

イ. 盲学校への通学の困難

ロ. 盲学校の教育方針に対する不満

- ① ある程度視力のある者も「盲」として画一的に考える方針
- ② 晴眼者社会との隔絶

ハ. H市立小学校に対する不満

- ① 受け入れ体制の消極性ないしは拒否的態度
- ② 視覚障害に対する無理解とそれに基づく不十分・不適切な教育活動
- ③ 晴眼者（健常児）との没交渉
- ④ 学校で配慮すべきいくつかの事の親への責任転嫁

ということになろう。B子および父母は、小学校4年までの経過について、いま自らは多くを語ろうとしない。「考えたくない。いやや。」とB子は言う。そして、「小学校にいる間、ずっと『盲学校の方がいい。盲学校へ帰るべきや』と言われてきた。私が転校するのを学校は狙ってはった。」と言い切る。「こっちは意地になってがんばってた。」とも。母も「こっち（高槻）の様子は全く分らなかったけど、来て良かった。」としみじみ言うのである。

I校でも全く初めてのケースであったが、担任をはじめとする視覚障害児教育への取り組みと、「障害児」学級でなく、普通のクラスで普通に学ぶことのできたことが、そう言わせるのであろう。

5. いま、中学校で

入学式のとき、担任はB子の存在をクラスの皆に説明した。以後B子の登下校の援助、球技での特別なルール、臨海での役割、文化週間での役割、体育大会の出場種目と級友の関わり等に、しばしばH.R.の時間をあて、更にB子をめぐってクラス全体の意見（中にはB子に対する手きびしい批判も）を出させていく。

文化週間の学年テーマも〈障害を持っている仲間も入れた〉仲間について、ということになり、「人間を返せ」の映画についてのH.R.では、人を大切にすることがクラスで行われているかが問い合わせられる。といってもB子だけが問題にされたのではない。同じクラスにRという孤立児がいるし、Sは登校拒否の傾向があり、Tは生活行動面での問題を持っている。それらを含めた取り組みである。

B子も少々消極的で、かつ身勝手だと思われている点はあるが、割当てられたクラスの任務をこなし、B子自身からすれば「ちゃんとクラスに位置づいていると思える。」と言う。演劇クラブに属し、この冬には発表ということで暗くなるまで練習している。全校クラブの時は点字クラブで、クラスの仲間だけでなく、2・3年生も入り、十数人が活動している。

学業の方はどうか。当初、中学校での教科担任制について、教える側、学ぶ側の不慣れが心配だったが、現在の様子は次の通りである。（※は1月現在のB子の意見である。）

国語・読解力はすばらしい。漢字はしんどい。自分で必要ないと思うところは切り捨てる。

- ・本読みはうまい。よく質問する。のびのびと授業を受ける。漢字が難しい。

※漢字は弱い。見えてる人の覚えるのと違うもの。

習字・書いたものを手でさわる。墨をすらうとしない。理由は「服が汚れるから」。実際そこら中真黒。習字は漢字の練習のためにやって行こうと思う。

- ・墨で書かせていたが複雑な字は視力の点で困難であるため、レーザーライターに変えた。漢字の記憶は悪い。

社会・みんなが白地図の作業中は、そのことに関して話をしてやる。B子は点

字で書く。板書は声に出してはっきり読んでやり、点字で書かせる。

- ・地図（盲学校用）が好きでよく見ているし、より深い内容を求めてている。
※私に使える白地図が欲しい。私は色なども塗れないもの。それに地図も地形図や火山なども分るようなものが欲しい。外国の州や都市、海流など今の地図帳ではよく分らないからあかんわ。

数学・点字でやっていて別に困っていない。

- ・計算を暗算でやるので間違い易い。全体にスピードが遅くなる。
※計算は墨字の方が早いに決まってる。レーズライターでしてたら時間がかかるもん。文章題はよく分るのよ。最近、方程式になって頭が混乱してきた。

理科・動物の生活、体のしくみ、分類の学習などは、具体的なイメージのない場合限界がある。見たことのないものは写真では通用しないので、レーズライターで図示はするのだが……。生活の様子などは説明すれば分る。

- ・やさしいことが案外分っていない。植物は触らせている。

※節足動物といったって、さわったことのあるのごく一部でしょ。私たちがさわって分るような教材欲しいよ。図鑑みて分るわけやないもの。

技術・型紙は切るところを折ってハサミで切らせた。しつけぬいの糸は通しの器具でやれる。運針は手縫いだから他生徒も変らない。

- ・ミシンが使えるようになった。

※こまかいもの作るの大好き。

音楽・校歌はバッチャリ。大きなきれいな声。

- ・全く問題なし。

※校歌ぐらいあたりまえでしょ。（ちなみに点字楽譜を覚えたにもかかわらず、小学校2年～4年は、普通の音楽教育を受けていなかった。）

美術・写生では、手で触れて木を描いた。ライトハウスの先生から、レーズライターに描いて色も塗れることを教わった。

- ・写生は、すぐ描いてしまう。想像画になる。舟と魚が同じ大きさになる。レタリングでは、左右対称の字が好き。

英語・アルファベットはレーズライターで入った。点字も知っている。発音も非常にきれい。文になったら点字にかえようと思う。

- ・発音は前ほどよくない。声が小さくなつた。宿題はよく忘れるが、やって出す。

※宿題いつも遅くなるのは時間がかかるからと、勉強がたてこんでたから。英語で困るのは、図があるのに見えないこと。だから「私」と訳しているのか「僕」なのかも分らない。中学の英語なんか内容的にはやさしい

のだけど、状況が分らないことが大変困る。手で見る本みたいに見える図があったらいいのに。

体育・短距離走は手をつないだり、メジャーに通したバトンを持ったり、声を頼りに走る。50m 11秒6。基礎体力は弱い。ねばり強さがない。危険を感じることもある。

・マット運動では開脚後転、側転ができる。腕の力が弱い。

水泳は10m位しか泳げない。級友も自分の種目をこなすのが精一杯で、B子のことを忘れがち。水泳では毎時間教師の心臓が悪くなる。

※メジャーは始めだけ。スピードがでないからだめ。基礎体力が弱いのは当たり前や。小学校4年まで、殆ど体育していないもの。水泳も21mは泳げるようになった。でも見えないから泳いでるうちにUターンしてしまうことがある。

H.R.・よく笑うようになった。休憩時間は一人でいる。

・班ノートを書かないことがある。他の者が問いかけても返事が返ってこなかったり、自分のことが話し合われていても下に向いている。

自分の気持ちが表現できない。言葉も少ない。自己防衛かも……。

※そうかな、たしかにクラブ以外は言葉は少ない。何か言おうと思って考えても、また次の言葉がかかってきて、それを考えているうちに、また次の話とくるので、いやになってしまって……。（耳からの情報が中心になるので、自分でも勘違いや行き違いがあると言う。また、ひとつのことに対する答えと次々と話が進んで、何から何まで答えなければならなくなる。自分にも悪いところがあるから、そう問い合わせられると困ってしまう。ということを言っている。）

中学校での様子は、大体以上のようなようであるが、いくつもの問題が当然あるとはいえ、まず学校に適合していると見て差し支えない。本人も喜んで通学している。学級通信「たまてばこ」にも毎回のように級友たちのB子に対する感想や意見が寄せられている。その中には、障害者に対する世間の眼に対する怒りや、クラスの中で、ついB子のことを皆が忘れてしまうことへの自戒、B子の能力の見直しと、自分たちの奮起などがもらっているが、ここでは省略せざるを得ない。

6. B子、その教育上の課題

B子はまだ中学1年生である。将来のことを考えるには至っていない。健常児でも無理なことだろう。しかし漠然とした不安がないではないらしい。「私は女だから仕事よりも、いい男の人を見つけて、お嫁さんになって、子どもを産

むの。」と言う。これには少々驚かされるが、以前には「私なんか眼がだめだから、結婚なんかしない。」と言っていたことを考えると、年令が進んだから出た言葉として受け取るべきか、それとも生きる自信が出てきたと解釈した方がよいのだろうか。いや「仕事よりも」というのは、B子特有の皮肉った一種のつっぱりとも見れないではない。あと何年か後に、より一層自信を強めた時、B子はきっと別の言葉を私たちに返すであろう。

それはともかく、B子は高校はせめて出たいと言い、父母もそれを当然のように望んでいる。（現在の学力の延長で高校進学は可能と考えられている。）そのことと関ってB子は次の事を望んだのである。

「お父さんは忙しいし、お母さんだって私の勉強だんだん見れなくなる。自分で勉強する気はあっても、参考書や辞書、事典など、てんで不十分でしょ。勉強するための教材がもっと欲しいの。だって点字の本ときたら、法律とか、医学とか、小説や詩や、いわゆる大人向きのはあるのよ。それから、小さな子向きのもね。点訳してくださる人も文学などはね、してくださいけど、私たちの参考書はね。他の人だったら、本屋に山と参考書あるでしょ。」

父母も同様であった。

「ニュースや一般情報はテレビやラジオでも得られる。またテープでもいい。だけど、子どもたちが自分で知識を積み上げていこうという資料が殆ど手に入らないのですね。点訳にしても、点字印刷にしても、その辺に力点をおいてもらえるといいのですがね。公報や『消費者ひろば』などは点字でもらっているのですが。」

B子のこの願いは、義務制レベルでの統合教育、いや盲教育全体を考える上でも重要なことだろう。特に統合教育においては、視覚障害児の進路は晴眼者と同じとまではいかなくとも、多様化されなければならないし、彼等自身の興味もまた、非常に多岐にわたっている。B子の知的要求を満たし、学習意欲を充足させうる資料・教材・教具が抜本的に、豊かに開発され、供給されねばならないと考えるのである。

7. おわりに

さて、高槻市での統合教育はまだ緒についたばかりと言える。途中転入のB子を除いては、小学校低学年を中心として約10名の在学を見るが、そのいずれもが、父母も、子どもも、学校側も、これで良いと言い得る教育の状況にあるとは決して言えないであろう。

B子についても、高槻で地元小学校・中学校に就学したことは、そのことだけで、B子に良い結果をもたらしたし、級友たち更には学校全体にも、さまざ

まな形で障害者に対する正しい認識を与えてきたと思う。だが、B子に本当に障害に打ち勝つ力をつけ、生きる力をつける仕事は、これからのことである。先に述べた教科学習の現状をみても、直ちに教材・教具の整備ができないまでも、教師の工夫と努力に委ねられる幾多の面もある。教育の物的条件・人的条件の恵まれない地域の中学校で、今B子は晴眼者なみに樂々と学習を続いている訳ではない。父母の力とB子の努力と、そして父母も認めるA中学校の教師集団の努力が辛うじて支えていると言える。

そのB子の学校生活を成功させる過程が、後進に途を開き、解決を要する課題をより具体的に示し、ひろく高槻の教育関係者に、この教育へのエネルギーの結集を促していくものとなるであろうと考える。